



『致知』で追究し続けてきた人間学の重要性が、脳科学によって証明される時代が到来した。脳の覚醒下手術で日本屈指の実績を持つ篠浦伸禎氏は、精神疾患の治療に人間学を導入して大きな効果を上げている。神渡良平氏とともに、脳科学から見えてきた事実を交えながら、人間学を修めることの意義を語り合っていた。

対談

脳科学が証明する人間学の効用

作家
神渡良平

かみわたり・りょうへい——昭和23年鹿児島県生まれ、九州大学医学部中退後、様々な職業に従事。38歳の時脳梗塞を患うが、懸命なリハビリで社会復帰を果たし、作家として独立。著書に「宇宙の響き——中村天風の世界」「下座に生きる」「佐藤一斎「言志四録」を読む」「人間この輝かしきもの」「天翔ける日本武尊」(上・下)「西郷隆盛人間学」(いずれも致知出版社)など多数。小林正親氏との共著「神様が教えてくれた幸福論」(致知出版社)も好評。

しのうら・のぶさだ——昭和33年愛媛県生まれ。東京大学医学部卒業。富士脳障害研究所、東京大学医学部附属病院、国立国際医療センターなどで脳外科手術を行う。平成4年東京大学医学部の医学博士を取得。シンシナティ大学分子生物学部留学。帰国後、国立国際医療センターなどで脳神経外科医として勤務。12年都立駒込病院脳神経外科医長。脳の覚醒下手術ではトップクラスの実績を誇る。著書に「人に向かわず天に向かえ」(小学館)がある。

東京都立駒込病院・脳神経外科医長
篠浦伸禎